

生活科 授業の構想

日 時： 平成12年10月5日(木) 2校時
 児 童：1年1組 38名(男子20名,女子18名)
 場 所： 附属旭川小学校 1年1組教室
 授業者： 玉 井 一 行

1 単元名「ぼくのかぞく、いえでのわたし」

2 研究授業のテーマ

第2次及び第3次での個性的な追求から生まれる自分の役割や家族のよさへの気づきを第4次で発展・応用することによって、より実感的な気づきを生むことができる。

〔単元全体に関して〕

子供個々が個性的に追求してきた内容を生かし、新たな典型事例をもとにした話し合い活動(相互触発<収束>)によって家族に支えられた自分の生活に気付くことができる。

〔本時に関して〕

3 単元について

(1) 単元のねらいと児童の実態

本単元は学習指導要領、各学年の目標(1)・(3)と、内容(2)・(8)と主に関連しています。

子供自身が家族とともにしていることや家族にしてもらっていることを振り返ることで、家庭の温かさ、家族の大切さ、家族のよさ、家族相互の役割やお互いの信頼感などに気づき、自分であることを考え、自分の役割を進んで行うようになることをねらいとしています。また、家庭生活における自分の生活を見直し、規則正しく健康に気を付けてよりよい生活をしようとする態度を育てることをねらいとしています。

子供たちは、愛情と信頼で自分を支えてくれる家庭の中で生活し、自分の側から家族とのつながりを感じています。しかし、家庭の中で自分の仕事やお手伝いとして家事の分担や自分のことを自分でする子供は多いのですが、家庭での役割意識には違いがあります。自分の役割意識は漠然としているのが実態です。また、家族のそれぞれの仕事に対する認識は、家計を助ける仕事と家事への着目度が半数ずつですが、表面的なものが多いです。家族のつながりの面では、朝食時に家族が揃わない家庭が半数以上あります。

《子供の実態調査の概要》

- ・ほとんどの子供が家庭で自分の仕事やお手伝いをしたことがある(89%)
- ・毎日、自分の仕事やお手伝いをしている子供は半数いる(55%)
- ・割と規則正しい生活をしている(朝食を食べる97%, 早寝早起き81%)
- ・母子家庭, 父親との別居家庭が3軒ある(8%)
- ・4月から今までに入院をした家族がいる家庭がある(21%)
- ・朝食は家族揃わないで食べる家庭のほうが多い(58%)
- ・家族の仕事についての認識に意識の差が大きい

(2) 求める授業の姿

本単元で特に重視することは、子供たちがそれぞれの家庭の中での家族のよさや家族の役割と自分とのつながりに気付くことです。また、授業を通しての実感ある気付きが、家庭生活の場で積極的に実践・改善できるようにすることです。そのために、調べ活動や自分でできることの実践活動や実践後の振り返り活動の充実を通して、家族と自分とのかかわりを発見したり、自分の思いや願いに基づいて自分の生活を見直そうとする姿を期待しています。

家庭の温かさや大切さ、それぞれの家庭がもつよさに気付き、家庭における自分の生活を見直し、よりよい生活を目指して実践しようとする授業

4 単元の目標

○自分の家族や家庭生活を見つめ、家族の一員としてよりよい生活をしようとする。

《生活への関心・意欲・態度》

○自分の家庭での生活を振り返り、家族のことや自分でできることについて考えることができる。

《活動や体験についての思考・表現》

○家庭生活を支える家族のよさや自分でできること、自分の役割に気付くことができる。

《身近な環境や自分についての気付き》

5 単元の指導計画（17時間扱い）

第1次 かぞくにしてもらっていること	4時間(本時4/4)
第2次 じぶんでできること だいさくせん	6時間
第3次 かぞくといっしょに	4時間
第4次 できるようになったよ	3時間

6 研究内容とのかかわり

(1) 新たな自分に気付ける特設単元としての設定【研究視点1の2】

本単元は第4次目を新たに付加し、生活への転移をより強く意識した特設単元化を図ります。

これまで、家族の仕事やお手伝いが中心となって構成されていた単元です。特設単元としては、家庭での自分の生活を考える視点を広くとらえ、自分の役割もお手伝いだけではなく、家族の喜ぶことや家庭が楽しくなること、自分のことを自分ですることなどより広い視点を重視します。個性的な追求活動が可能となり、獲得した基礎・基本を応用・発展する第4次（転移）によって、家族と自分とのかかわり、自己認識の一層の高まりを期待することができます。

—— 特設単元設定の主な視点 ——

- ①家族と自分とのかかわりに対する気付きを生かした家庭実践が可能である。
- ②学習を通して、できるようになったことが広がり「新たな自分」を発見することが可能である。
- ③実践活動は、子供の願いや思いからの発想と選択が可能で、個性的な内容である。
- ④活動に連続性と発展性がある。

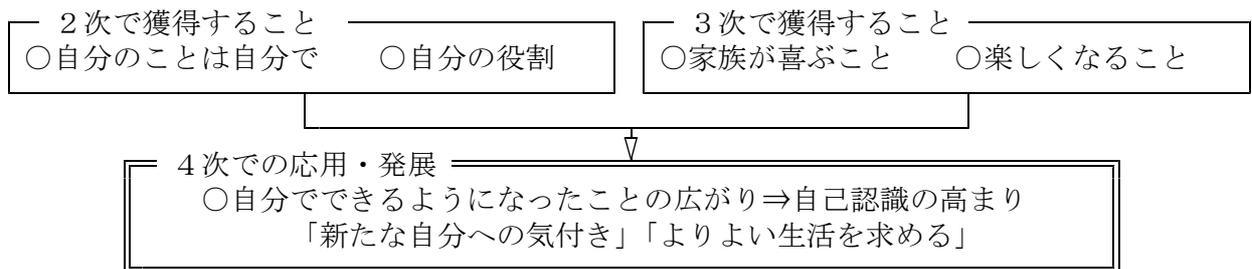
単元構成を連続的、発展的に工夫し「実践⇒振り返り」を重ねることによって、生活の場への学習の転移を「新たな自分」への気付きとして検証することが可能です。

(2) 生活への転移を重視した単元構成の工夫【研究視点2の2】

生活への転移を重視するための工夫として、家庭生活の場での実践活動を重ねて位置付けました。また、活動視点と「授業⇒家庭生活への転移⇒授業での振り返り」を一層効果的に保障できるように4次構成としました。1次から3次で発見した基礎・基本を、4次目で応用・発展させます。

<単元構成上の各次の位置付け>

1次は、単元のオリエンテーリング的な導入です。1次2次3次で発見した基礎・基本が4次(特設部分)に転移していくような単元構成です。



次	時	学習の流れ	主な子供の学習活動	見取りや働きかけ	研究との関連
1 かぞくにしてもらっていること(4)	1	対象との出会い	家族あてクイズをしよう		取束をねらった相互触発【研究視点3】
		活動への見通し	家族にしていることを調べよう	調べようカードの用意	
	2	個性的な追求活動(家庭)	各家庭での観察・調べ活動		
		まとめの活動 本時2/2	家族にしていること発表会をしよう	相互触発を生かした気付き	
2 じぶんでできること	2	対象との出会い	○○君のがんばり紹介 家族のためにできることをした友の体験から関心を高める	1次での気付きを生かした事例の紹介	取束をねらった相互触発【研究視点3】
		活動への見通し	自分にできること大作戦をしよう	がんばり表の用意	
	2	個性的な追求活動(家庭)	計画に沿って各家庭で、自分にできることを進める ・お手伝い	活動への励ましの依頼 ・激励 ・共に活動 ・写真やVTR	
		振り返り	発表会から家族に支えられている自分に気付く	自己評価カード	

と だ い さ く せ ん (6)	1	活動の 見直し	・自分のことは自分で 中間交流会で、各自のが んばりを発表し合う ・がんばっていること ・困っていること	類似活動の子供のグルー ピング	
	3	まとめの 活動	がんばり発表会をしよう		多面化をねらった相互 触発【研究視点3】
		振り返り	自分でできることを広げようとする		自己評価
か ぞ く と い っ し ょ に (4)	1	対象との 出会い	お手紙紹介		収束をねらった相互 触発【研究視点3】
		活動への 見通し	家族と一緒に楽しいこと交流会		
	1	個性的な 追求活動 (家庭) 活動の見直し	日常的に家族と一緒に楽 しいことはどんなことが あるか調べる活動 ・まとめ方 ・困っていること	調べようカードの用意	
4	1	対象との 出会い	自分の役割を見直そう		生活への転移を意図し た家庭での実践の場 【研究視点1】
		活動への 見通し	何ができるようにかな		
		個性的な 追求活動 (家庭)	冬休み中に家庭で実践		
で き る よ う に な っ た よ (3)	2	まとめの 活動	できるようになったこと交流会		多面化をねらった相互 触発【研究視点3】
		振り返り	自分でできることの広がりから新たな自分に気付く		自己評価

2次では、各家庭での1週間程度の実践活動の場を設定しました。4次では、長期休業をこれまで獲得した基礎・基本の応用・発展の実践の場として活用します。

(3) 評価活動の工夫【研究視点2の3】(本時)

各次に家庭での実践が追求活動として位置付けられていますので、各次の終末では自分なりに考え、実践した自分の姿を自覚させることをねらいとした自己評価を位置付けます。各次ごと活動の節目に累積した自分の頑張りを見つめ直すことで自分の成長に気付くことが可能です。さらに、実践の振り返りに加えて、次の自分はどうか「今後の自分への期待を込めた評価」項目も加え、活動に連続性と発展性をもたせます。

本時に関わる自己評価の内容

- ・「自分の家族に対してどう思っているか」
⇒累積した自己評価から自己の変容に気付かせる資料とする
- ・「自分にできそうなこと」
⇒次の自分を評価することで生活への転移を意識させる

(4) 相互触発を生かす手立ての工夫【研究視点1の2】(本時)

本時(1次のまとめの段階)は、収束をねらう相互触発の機能を生かす場面です。子供たちが家族の愛情に気付く(収束)ために、以下のような手立てを工夫しました。

①発表を類型化する板書の工夫

前時に続いた「家族にしてもらっていること発表」の内容を次の視点で類型化しながら板書します。発表によって、量的な多さにも気付いていくはずですが、

- ・家計に関すること
- ・家事に関すること
- ・家族の楽しみに関すること
- ・その他

②典型事例の紹介

してもらっていることの発表の次に、「してもらっていることの中で嫌なこと」についての事例を紹介します。典型事例を選択する視点としては、矛盾、意外性、類似した意識の多さ、共感的な考え易さ、家族の意図を感じやすい、0552等です。

- 嫌いな食材が食卓やお弁当に入っていること
- テレビやゲームの時間制限

紹介の後、類似した体験を紹介させ、共感的に考えさせます。

家族が意図的にしていることへの思いや、考えを子供たちなりに考えて、交流することによって家族の愛情への気づきを期待しています。

③発表と気づきとの関連付けを図る助言の工夫

典型事例の紹介によって、自分では嫌いだった家族の行為に対して家族の愛情を感じた子供たちに、『他にもこんなことはあるのではないか』を考えさせます。このことによって、板書にある「家族にしてもらっていること」は全て、家族の愛情の現れであることと関連付けていきます。

気づきの発表に対して、どうしてそう思うのか理由を発表させることで、より家族の愛情に対する思いが深まっていくことが期待できます。

7 本時の学習

(1) 本時の目標

- 家族にしてもらっていることについての交流活動へ進んで参加しようとする。
- 家族にしてもらっていることの事例を基にした話し合いから、家族の愛情に気付くことができる。

(2) 本時の展開

主 な 学 習 活 動	教 師 の 働 き か け	研 究 と の 関 連
1 本時の活動を確認する	○前時の想起	
家族にしてもらっていることについて考えよう		
2 家族にしてもらっていること発表会の続きをする	○内容の似ているもので板書に類型化していく ・家計のための仕事 ・家事に関する仕事	家族の愛情に気付く相互触発の機能を生かした交流活動 【研究視点3】
3 家族にしてもらっていることについて話し合う 【感想】 ・とても多い ・こんなにたくさんある ・家によって違うな ・どうしてこんなにしてくれるのかな	・家族の団らん ・家族の楽しみ ・一人一人のよさ ○家族にしてもらっていることで嫌なこと事例を紹介し交流する ・嫌いなおかず ・テレビやゲームの制限	
家族の愛情に気付く		収束をねらった相互触発【研究視点3】事例の理由を考え、交流させる
4 振り返りをする	○自己評価させる ・家族に対する思い ・次の自分の行動	⇒家族の自分への思いに気付かせる ※家族にしてもらっていることと関連付ける
5 次時予告		次の自分を評価する 【研究視点2の3】

8 授業観察の視点

○家族の愛情に気付く（収束）契機となる事例紹介は有効でしたか。

9 授業観察の役割分担

省略

10 事後研討議の柱

- 研究視点1～生活への転移をどう図っていくのか，授業で何を検証するのか
- 研究視点2～発展的な4次目の構成は妥当であるか
- 研究視点3～相互触発の機能を生かす手立ては具体的・効果的であったか（本時）

11 板書計画

